

青 畜 号 外
令和 4 年 5 月 1 2 日

報道機関各位

青森県農林水産部畜産課長
(公 印 省 略)

高病原性鳥インフルエンザの発生農場（横浜町 1 例目）に係る
疫学調査チームの現地調査概要の公表について

令和 4 年 4 月 9 日（土）に国の疫学調査チームが実施した発生農場の現地調査概要
について、別紙のとおり公表されましたのでお知らせします。

農林水産省 HP

https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/tori/r3_hpai_kokunai.html

報道機関用提供資料		
担当課 担当者	農林水産部畜産課衛生・安全グループ 副参事 田中 慎一	
電話番号	直通	0 1 7 - 7 3 4 - 9 4 9 8
	内線	4 8 1 8
報道監	農林水産部 次長 蛭名 芳徳（内線：4 9 6 6）	

青森県横浜町（国内 18 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 4 年 4 月 9 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は海岸から 1.2km 内陸の砂丘帯に位置しており、周囲を森林に囲まれていた。砂丘上には砂丘間や砂採取後のくぼ地が池となっている。
- ② 農場から 800m 程の場所にある池ではカモ類が約 30 羽確認された他、900m 程の場所にある池ではカモ類が 20 羽程度確認された。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時 42 日齢）の 4 月 6 日以前の 1 日あたりの死亡鶏は数羽～10 羽程度であったが、6 日に 60 羽が死亡したため、管理獣医師に連絡し写真を送付したところ、鶏ブドウ球菌症（浮腫性皮膚炎）が疑われたため、通報はしなかったとのこと。なお、死亡鶏は鶏舎内に散在していたとのこと。
- ② 7 日には 90 羽死亡（その後、獣医師到着までの間にさらに 100 羽死亡）したため、再度獣医師に連絡し、獣医師が剖検を実施したところ、肺のうっ血、心嚢水及び腹水の増加並びに気管充血がみられ、鳥インフルエンザを疑ったため通報したとのこと。
- ③ 疫学調査時には、発生鶏舎の処分は終了しており、発生鶏舎以外の鶏舎では飼養鶏に特筆すべき異常は認められなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 農場専属の飼養管理者 2 名で飼養管理を行う他、系列会社の社員 2 名が日常的に来場し、飼養管理作業は行わないが鶏舎内も含め状況を確認しているとのこと。
- ② 飼養管理者は鶏舎ごとの担当分けはしていないとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 農場は、系列グループが所有する養豚場の敷地内に所在しているため、農場へ到達する道は隣接する養豚場の衛生管理区域を通過しており、農場関係者以外が通行することはなかった。
- ② 飼養管理者が農場に入る際は、養豚場入口で自家用車から養鶏農場入口までの移動用車両に乗り換え、養豚場出入口車両消毒装置を通過後、当該養鶏農場入口で再度動力噴霧器を用いて車両消毒を実施していた。なお、養鶏農場内の移動については、養鶏農場飼養衛生管理区域内用の作業車両を用いていた。
- ③ 飼養管理者以外が農場に入る場合は、系列本社事務所でシャワーインし、車両消毒ゲートを通過していた。
- ④ 作業者は、系列本社事務所でのシャワーインの後、養鶏農場入口で再度シャワーインの上、飼養衛生管理区域内で農場専用の長靴、衣服、手袋を着用すること。農場内に立ち入るが鶏舎には立ち入らない者は、再度のシャワーインは行わず農場入口の動力噴霧器で長靴を消毒後、衛生管理区域内にある外来者用更衣室で農場内専用作業着、長靴に履き替えるとのこと。
- ⑤ 鶏舎に入る際には、各鶏舎入口内側に置かれた踏み込み消毒槽内で長靴を脱ぎ、鶏舎内用長靴に履き替え、手指消毒と手袋の交換を実施しているとのこと。
- ⑥ 鶏舎はセミウインドレス鶏舎で、吸気口には約 2.5cm の金網が設置され、金網の内側に開閉可能な板が付属していた。鶏舎の壁の下部は開閉可能なパネルになっており、パネルの下部は固定されておらず一部浮いている箇所もみられた。パネルの内側には約 3.5cm の金網が設置されていた。天井の排気口には金網は設置されてい

かったが、すべてに換気扇が設置されており、24時間稼働しているとのこと。

- ⑦ 鶏舎単位で同一日齢の鶏が飼養されており、通報時点では農場内は5つのロットに分かれ、発生鶏舎を含む2号～6号鶏舎が42日齢、最も若いロットは17・18号鶏舎の38日齢であった。
- ⑧ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は除糞、鶏舎の洗浄消毒、入雛準備のため計10日間程度の空舎期間を設けているとのこと。
- ⑨ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌出来る構造となっていた。
- ⑩ 飼養鶏への給与水は井戸水を塩素消毒してから用いているとのこと。
- ⑪ 鶏糞は、オールアウト時に重機を用いて鶏舎から搬出し、農場外の堆肥場で堆肥化しており、直近1ヶ月以内の搬出はなかったとのこと。
- ⑫ 飼養管理者によると、死亡鶏は毎日の健康観察時に回収し、農場内専用車両で、農場入り口のすぐ外側にある金属製の蓋付き容器に保管していた。その後、自社運送車でほぼ毎日化製場へ輸送しているとのこと。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、農場内でカラス、スズメ、ネコをみかけることがあるとのこと。また、農場内や鶏舎周辺ではヒミズモグラの通路の痕跡が多数見られた。
- ② 農場内に沈殿池（約7m四方）及び調整池（約20m四方）があり、雨水やオールアウト後の洗浄水が貯留していた。周囲は柵で囲まれ、池の上部には鳥よけのテグスが張られていたが、テグス間隔が広く一部は切断していた。
- ③ 入雛から5週齢までは殺鼠剤と粘着シートを鶏舎前室に設置しており、ネズミがかかることもあるとのこと。